

不登校児童生徒の学びの支援検討部会 報告資料

1 部会の方向性

- テーマ「つながる」(学校・友だち・担任・教室etcとの「つながり」)
(R2第1回部会より)

「つながる」を大きなテーマとして、「心のサポート的な支援」や「学びの支援」について、今まで行ってきた不登校等の児童生徒への支援に培った見識に基づき、よりきめ細やかな支援の充実を図っていく。

2 徳島県GIGAスクール構想を活用した不登校等の児童生徒への支援事例

(R2第1回部会より)

- (1) 家庭訪問の代わりにタブレットで、朝または夕方等に児童生徒や保護者と連絡をとる。(まずは、つながること、顔を見ること、声をかけること)
- (2) 担任からの連絡やクラスの様子をタブレットを通して伝える。
- (3) 別室登校、保健室登校の児童生徒に対して授業の様子を配信する。
- (4) 学校行事等、学校や教室の様子を配信する。
- (5) 教室の自席にタブレットを置いて、授業やホームルームの様子を配信し、教室の雰囲気伝える。
- (6) 朝礼等での校長講話を、各教室に配信するのと同じように、保健室や別室にも配信する。
- (7) 宿題や学習用プリント等の配信→提出→添削→返却。 等

3 モデル校での調査研究

(R2第2回部会より)

(1) 実施要項(一部抜粋)

モデル校は、児童生徒の実情に応じた研究目標を設定し、不登校等の児童生徒への支援を行うに当たって、既存のICT環境に加え、徳島県GIGAスクール構想の推進で整備されるICT環境を活用することで、次のいずれかのうち2つ以上の内容を含む実践的な調査研究を行う。

- (ア) 児童生徒や保護者等とのコミュニケーションの活性化を図るICT活用
- (イ) 児童生徒の心のサポートを図るためのICT活用
- (ウ) 別室(保健室等)又は自宅や病院等の児童生徒に対するオンライン教育におけるICT活用
- (エ) ICTを活用した教材の作成及び児童生徒への提供方法、並びに個に応じた指導におけるICT活用

(2) モデル校での取組状況

(各校への聴き取り：6月末～7月上旬)

担任や養護教諭とWeb会議システムで繋ぎ、話をする機会をもつ
保健室や自宅への授業配信
学校行事等の保護者への配信
夏休みのタブレットの持ち帰りに向けての試行
全児童生徒への一斉送信 等

4 不登校児童生徒への支援の取組状況調査(10月中旬)

(1) 目的

ICTを活用した不登校等の児童生徒への支援の事例を収集・普及することで、従来から行ってきた不登校等の児童生徒への支援を更に充実させていくことを目的とする。

(2) 対象

県内全ての公立小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、特別支援学校

5 取組事例

	場面等	具体的な取組	成果	課題
1	別室（保健室・空き教室等）	・Web会議システムで学級と繋いで授業を実施。 ・ノートを取ったり、チャットやスタンプなどで担任の問いかけに反応したりしている。	・該当児童は、積極的に授業に参加。 ・級友らも一緒に授業を受けられることを喜んでいる。 ・休み時間には、級友がホスト端末の近くに集まり、コミュニケーションを図っている。	・端末や回線の問題。 ・通信の質の低下。 ・当該児童の登校時間が曖昧なため、規則的対応が困難。 ・他の不登校傾向の児童に対しての説明をどうすべきか。
		・Web会議システムで学級と繋いで授業を実施。 ・他の教員が当該児童と同じ部屋でサポートを行う。	・サポートがあることでストレスが減り、登校出来るようになってきた。 ・本人・保護者ともにとっても良い反応。 ・様々な研修会や講習会で、この事例の紹介をしている。	・電源ONでいつでも使用できるよう、日々のメンテナンスに苦労している。
		・Web会議システムで教室と繋ぎ、授業を実施。	・普段顔を合わせない級友と一緒に授業を受けることができ、楽しそうに授業に参加できた。 ・級友が、別室を訪れたり、数回だが、実際に教室に入って級友と一緒に授業を受けたりすることができた。	・教室にもタブレット端末を置く必要があるため、不登校生徒の意思確認が必要。 ・顔を見られたくないのか、カメラとマイクをOFFにしている。そのため、生徒の反応が分かりづらく、授業が一方通行になる。
		・リモートでの授業参加。 ・児童側のカメラとマイクはOFFにし、支援者がチャットで関わる。 ・授業を受けるだけでなく、学級の雰囲気も味わわせるように配慮する。	・「教室で授業を受けてもついていける、分かる」素地を培うことができる。 ・徐々に力と自信をつけて、教室で他の児童と一緒に活動する時間が増加。	・リモートによる授業支援を行える職員の確保。 ・「このままずっとリモートによる学習活動でよい」と思われないような手立て。 ・級友たちの理解をどう得るか。
		・Webドリル教材を使用した学習。	・基礎・基本の定着。 ・支援者や担任は、取り組んだ課題のデータを基に、今後の対応を検討することができる。 ・対応状況の共通理解で、他学年の指導にも活かしている。 ・データ等の共有による学習準備の時間短縮。	・ICT機器やソフト（アプリ）の効果的な活用についての教材研究の時間確保。 ・スキルの高い教職員への過重負担。
	適	・文化祭の生中継や学級旗紹介・パフォーマンスをWeb会議システムで見られるようにする。	・文化祭の様子を事後に見られて大変好評だった。	・特になし。

2	応 指 導 教 室	・リモートでの授業参加。 ・数学の授業動画の配信。	・リモート授業には、最初は緊張していたが、参加できた。 ・授業の動画配信は、いつでも生徒が視聴することができ、都合の良い時間に学習できた。	・リモート授業で使用する学習プリントを事前に家庭に届ける必要がある。 ・授業時間や授業内容の変更等を、事前に伝える方法の工夫。 ・全てのリモート授業に参加できないので、生徒によって学習の進度が違ってくる。 ・リモートでの授業を受けている生徒の理解度が分かりづらい。 ・だんだんとリモート授業に参加しなくなった生徒がいる。
3	自 宅	・病気で欠席しがちな児童に対して、ICTを活用した心のサポート的支援。 ・Web会議システムを活用して担任とコミュニケーションを図る。 ・始業から下校まで、教室の様子を配信。 ・学級の雰囲気を感じてもらう。 ・休み時間や放課後に1対1で行うWeb会議で担任と会話。(マイク・カメラON)	・本人の希望で、カメラやマイクはOFFにしているが、児童は毎日の配信を楽しみにしている。 ・級友が、画面越しに話しかけたり、できた作品を見せたりして積極的に関わろうとしている。	・特になし。
		・児童用タブレット端末のアラームを設定し、朝起きられるようにする。 ・時間割等の予定を伝える。 ・ビデオ通話で児童の状況や様子を確認。	・児童本人と直接コミュニケーションをとることができ、当該児童の言いたいことや気持ちが教員に伝わりやすい。 ・時間や手間をかけずにスピード感をもって次の対応に繋ぐことができる。 ・心身の状態の把握などができる。	・児童側のタブレット端末で受け入れが選択できるので、学校側からコミュニケーションをとれないこともある。 ・ビデオ通話で表情を見ようとしても、映してもらえない時もある。
		・コミュニケーションツールのアンケート機能を使った毎日の健康調査。 ・不安なことや心配なことについて、記入・送信することで、養護教諭がダイレクトに相談活動を行う。	・毎朝、健康調査が送信されており、家庭でも早起きをして健康的な生活を送ることができる。	・家庭との連携が重要である。 ・家庭の通信環境の整備。 ・端末の不具合に即応できない。

- 6 今後のスケジュール
- *モデル校への聴き取り
 - *活用事例集等の作成
 - *第3回部会の開催(1月中)
 - *活用事例集等の完成・各校への配付